初期万国博覧会に見られる「中国趣味」から「日本趣味」への趨勢について

馮　赫　陽

The Transition from Chinoiserie to Japonisme in Early World Expositions

FENG Heyang

The fine arts are an important element in any international exhibitions, especially in the early world expositions. China and Japan participated in international expositions in the 1870s. Early in the 16th century, the Portuguese, Spanish and Dutch had traded in Chinese porcelain and Japanese lacquer with Europe, and Chinoiserie and Japonisme became popular in European courts in the 18th century. However, most Far Eastern fine art constituted of court collections or was privately owned. It is the world expositions held in the late 19th century that provided the public in Europe with the chance to see contemporary fine arts from the Far East.

However, as Westerners began to learn more about China and Japan, the public taste, led by the judgment of connoisseurs engrossed in Chinese art, was directed to the ornamental design of Japanese manufacture. Some European porcelain manufacture abandoned the Chinese style, and turned to Japanese designs to refine their goods to meet public demand. As a result, Chinese fine art, which was once highly praised by the European courts, failed in the publicity campaign of world expositions.

This study aims to trace the changing public tastes in Far Eastern fine arts in the late 19th century by analyzing the public remarks on the exhibits in contemporary newspapers.

キーワード：中国趣味、日本趣味、初期万国博覧会

はじめに

16世紀以降においてアジアに進出して来たポルトガル商人やスペイン商人そしてオランダ商人により、中国と日本の芸術品が次第にヨーロッパへ運ばれ、ヨーロッパの上層社会における中国趣味すなわちシノワズリーが盛んに流行した[1)]。しかし、それらの東アジアの芸術品は殆どヨーロッパの王室や或は富豪

1）Oliver Impey, *Chinoiserie: The Impact of Oriental Style on Western Art and Decoration*. Charles Seribner's Sons, 1977.

な私人の収蔵品になった。ところが19世紀後半に興された万国博覧会は欧米の民衆に同時代の東アジアの芸術品を見るチャンスを提供した。その後、さらに欧米列強が勢力を拡大するなかで、東アジアの情勢にさらに関心を寄せていた。そして日本の明治以降の近代化が進展したことで、欧米の注意を引いたのは中国より日本であった。そのため日本の芸術品は大量にヨーロッパへ渡り、もともと流行していた中国趣味に取って代わって、日本趣味すなわちジャポニスムを興起したのである[2)]。19世紀末に世界の先進国が相次いで現代化を完成した時に開催された万国博覧会は、新興の日本と中国からの芸術品にとっても互いに競い合う場所を提供していたと言える。

日本における博覧会研究について、伊藤真実子氏の「博覧会研究の動向について」によれば、1980年代以来、日本の博覧会研究が吉田光邦氏の日本の産業技術史としての博覧会研究という流れと、吉見俊哉氏の帝国主義の祭典としての博覧会研究という流れを代表とする二つの傾向があり、それらに関連して経済史、美術史などの多方面からの成果が見られると総括している[3)]。また、清末における中国の万国博覧会への参会については、鈴木智夫氏の論文「万国博覧会と中国」がある[4)]。

中国における万国博覧会研究は、1980年代後期に始まる。馬敏氏、梁碧莹氏や洪振強氏、艾險峰氏の研究を代表として、早期万博と中国近代化の展開に関して論究し、万博に見る中国の対外関係を検討している[5)]。

また古瀛偉氏と趙佑志氏などの台湾学者は台北中央研究院に保存されている清朝外交公文書の一部「賽会公会檔案」を通じて、清朝政府の万博への参会について考察している[6)]。

しかし、これまでの早期万国博覧会に関する研究は、主に中国や日本の対外関係史・産業発達史の視点から早期博覧会の総括または個別の博覧会の事例研究、そして各国の万国博覧会への関与を検討するものである。万国の風情の展覧場であった早期万博において極東の日本と中国からの出品物、特に芸術品に関して西洋人にどのような印象を与えたかなどの問題は看過されてきた。

そこで、本稿では、19世紀50年代から70年代までの万国博覧会において日本と中国が出品した際に喚起したヨーロッパ大衆の東洋趣味をめぐって、「中国趣味」から「日本趣味」への趨勢を究明するものである。

---

2) ジャポニスムに関する研究はSiegfried Wichmann氏の*Japonisme : the Japanese influence on Western art since* 1858（Thames and Husdon, 1981）や大島清次氏の『ジャポニスム：印象派と浮世絵の周辺』（美術口論社、1980）、馬淵明子氏の『ジャポニスム：幻想の日本』（ブリユッケ、1997）などの代表的な著書がある。

3) 伊藤真実子「博覧会研究の動向について――博覧会研究の現在とその意識」、『史学雑誌』第117編第11号、2008年11月、103-111頁。

4) 鈴木智夫「万国博覧会と中国」、『愛知学院大学人間文化研究所紀要』11、1996年9月、65-77頁。

5) 馬敏「中国走向世界的新歩幅――清末商品賽会活動述評」、『近代史研究』、1988年第1期、115-132頁。
馬敏「中国近代博覧会事業與科技、文化伝播」、『歴史研究』、2004年第2期、98-117頁。
梁碧莹「民初中国実業界赴美的一次経済活動――中国巴拿馬太平洋博覧会」、『近代史研究』、1998年第1期、82-99頁。
洪振強、艾險峰「論晩清社会対博覧会の観念認知」、『学術研究』、2009年第2期、101-108頁。

6) 古瀛偉「従「炫奇」、「賽珍」到「交流」、「商戦」:中国近代対外関係の一個側面」、『思與言』第24巻第3期、1986年。
趙祐志「躍上国際舞台：清季中国参加万国博覧会之研究（1866-1911）」、『台湾師範大学歴史学報』第5期、1997年。

一、万国博覧会との出会い

１、博覧会時代の序幕

19世紀は博覧会の時代である。1798年、フランスにおけるナポレオンの提唱で初めて内国博覧会が開催された。その内国博覧会において金メダルが対英貿易のために最も力を尽くした製造者に授与された。その後、1801年から1849年まで、フランスにおける９回の内国博覧会が開催された。こうした内国博覧会の刺激で、19世紀になると、ヨーロッパ諸国は自国で一連の博覧会を開催した[7)]。

しかし、1851年までにイギリスは、無関心あるいは偏見を持っていため、壮大な博覧会を開催することができなかった。1851年、アルバート公は自ら融資し、ロイヤルアートアカデミーと、産業革命の成果としての新技術や新しいデザインなどを広めるため、万国博覧会を共催した[8)]。その後、ロンドン博覧会の様式は、ほかの国々にも模倣された。その結果、欧米を中心とする万国博覧会時代が開幕したのである。

２、日本と中国の参会

(1) イギリス外交官Rutherford Alcockと東アジアの出品物

日本と中国が万国博覧会へ公式に参加したのは1870年代であった。しかし、1851年、最初のロンドン大博覧会において中国の展示場が設立され、中国からの大きな花瓶・清朝官僚の肖像画・青銅器・陶磁器・屏風・牙彫・七宝焼などが展示された。その中の中国からの陶磁器とベッドのフレームが展覧会から賞を授与された。それは次のものである。

Class XXV（Jury 25）
Ceramic manufacture, china, porcelain, earthenware, &c.
…
Prize Medal
Alcock, S., and Co., China
…
Class XXVI（Jury 26）
Decoration furniture and upholstery, including paper hangings, papier mache, and Japanned goods
…
Prize Medal

7） *The encyclopædia Britannica : a dictionary of arts, sciences, and general literature*, Vol. 1, Adam and Charles Black, 1875.

8） Charles H. Gibbs-Smith, *The Great Exhibition of 1851*, 2nd edition, London: HMSO, 1981.

Alcock, R., China, bedstead.[9)]

この受賞名簿から、Alcockという人物によって出品された中国製の陶磁器とベッドのフレームが受賞したことがわかる。しかし、その人物と中国の関わりについての詳細な記録は見られない。

その後、1862年の第二回ロンドン大博覧会における日本の出品についての記事からAlcockの身元がわかる。1862年9月20日付の“The Illustrated London News”には次の記事が掲載されている。

> In a sequestered portion under the north-eastern galleries on the British side of the Exhibition building is the Japanese Court…. This addition to the present exposition, consisting of articles from a hitherto unexporting country, is mainly due to the exertions of Mr. Rutherford Alcock, her Majesty's Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary at the Court of the Taikoon of Japan; but several other gentlemen have contributed to the collection …. The contributions of Mr. Alcock comprise 190 specimens of lacquer-ware, lacquering in wood, and inlaid wood and lacquer mixed, consisting of lacquered and inlaid cabinets and stands, lacquered trays for various purposes, toilet and luncheon-boxes, tables, bowls, nests of drawers, and so on.[10)]

とあり、AlcockはRutherford Alcockであり、イギリスが日本へ派遣した特命全権公使であったことがわかる。彼は個人で収蔵していた190件の日本漆器を第二回のロンドン大博覧会の日本展示場に出品したのであった。

しかし、Rutherford Alcockの経歴を辿れば、彼は日本に赴任する前に、中国の福州駐在総領事を務め、イギリスと中国の通商に力を注いでいたことがわかる。1851年、第一回のロンドン大博覧会の際、Rutherford Alcockは、中国における新しい商業活動の利益を求め、中国の出品物を探索し、ロンドン大博覧会の運営委員会に郵送した。このため彼が選んだ工芸品の青銅器や象眼細工、陶磁器、エナメル細工などは、ロンドン大博覧会に展示され、高い評価を受けたのであった[11)]。

このように最初の万国博覧会に、中国政府と日本政府とは出品はしなかったが、イギリスの外交官であったRutherford Alcockの尽力によって、中国と日本の芸術品や原料などがすでにロンドンで開催された二回の大博覧会においてヨーロッパの人々に知られることになったのであった。

(2) 維新前後の日本と万国博覧会

日本の最初の万国博覧会についての記述は福沢諭吉の日記である。福沢諭吉は、1861年に遣欧使節団

9) “The Great Exhibition: Official Award of the Prizes”, *The Illustrated London News*, Oct. 18, 1851.

10) “The Japanese Court in the International Exhibition”, *The Illustrated London News*, Sept. 20, 1862.

11) Alexander Michie, *The Englishman in China during Victorian era: as illustrated in the career of Sir Rutherford Alcock*, Edinburgh : W. Blackwood, 1900. pp. 200–201.

の成員としてヨーロッパを遊歴し、1862年の第二回ロンドン博覧会を参観している。その時の記録の一部が次の記述である。

> 西洋の大都会には数年毎に産物の大会を設け、世界中に布告して、各々其国の名産、便利の器械、古物奇品を集め、万国の人に示すことあり。之を博覧会と称す。凡そ当時世に行はるゝ諸種の蒸気機関、越列機（エレキトル）、瓦児華尼（ガルハニ）の器械、火器、時計、龍吐水、農具、馬具、台場、軍艦、家作等の雛形、衣服、冠履、文房具、化粧道具、古代の名器、書画等一々枚挙するに遑あらず、之を概すれば人間衣食住の需用、備はらざるものなしと云て可なり。斯く千万種の品物を一大廈の内に排列して五六ヶ月の間、諸人の展観に供し器品の功用は各其主人ありて之を辨解す。諸人之を観て買はんと欲すれば直に博覧場の物は得べからざれども之を産し、之を製する所より定価を以て買取るべし。又博覧会の終に至れば会に出したる品物も入札の売買あり。都会に博覧場を開く間は諸邦の人皆是に輻湊して一時都下の繁昌を致す。千八百六十二年龍動に博覧場を設け、毎日場に入るもの四五万人に下らず。[12)]

とあるように、西洋の博覧会において組織の形式、出品物、展示場などの情報が紹介され、1862年のロンドン大博覧会が賑っていた様子がわかる。

1867年、日仏親善のために徳川幕府は、パリ万国博覧会に薩摩焼・鍋島焼等を出品し、さらに将軍の弟である徳川昭武をパリに派遣した。その時、勘定格陸軍附調役であった渋沢栄一は使節団の随員としてパリ博覧会を見学した。彼は『航西日記』に、次のように記している。

> （五月）十八日（西洋六月廿日）晴、午後二時より、フランセスミラ誘引にて博覧会を観るに陪す荷蘭留学生等も従へり。
> 博覧会場は、セイネ河側に一箇の広敞の地にて、周囲凡一里余もあるべく元調兵場なり。其中心に形ち楕円にして巨大の屋宇を結構し、門口四方より通じ彩旗を立繞らし、内部外部と分ち、順次に道路を通じ、徘徊遊覧に便ならしむ。内部は、乃屋宇の内にて、東西諸洲此の会に列する。国々其排列する物品の多寡に応じ、区域の広狭を量り、各部分を配当せり。仏蘭西は、自国の事故最も規模を盛大にし、天造の霊妙人工の精微産物の豊備、学芸の高尚なる。之を世界万国に比較して愧づべからざるのみならず、以て其得意を示すに足るべき。目途なれば、其場屋の半を占めたり。英吉利は、其六分の一を占め、孛漏生・白耳義・日耳曼聯合州・澳斯多利は、何れも其十六分の一を占め、魯西亜・米利堅・伊太里・荷蘭・瑞西は三十二分の一に過ぎず、墨是可・西班牙・都児格は其半にして、葡萄呀・希臘・丁抹・埃及・巴社・亜弗利加等は又其半に過ぎず、我邦の区域も是等と同等にして、之を支那・暹羅両国と三箇に分ちて配置せしが、我物産の多く出でしにより、遂に其半餘を有つに至れり。場中排列する所のもの凡物華天寶より日用の雑品学藝に係る。諸道具とも自然の化育によりて成るもの或は窮理の上より、神を極め精を殫して造りし物上は鴻荒希代の古器珍

12)『福澤全集』第一巻、「西洋事情初編　巻之一」、国民図書株式会社、1926年９月、331頁。

品を聚めて残す所なく、下は現世發明の新器を陳て餘すことなし。各国品物の異を観ば、自ら其国の風俗其人の智愚も思ひやられ、殊に東洋西洋風氣俗尚の懸隔せる凡器用服色の上に就ても略其一端を概見すべし。都兒格・埃及・亞剌比亞の如き、亦其風俗を異にして、荒僻陋固の景況、其物品によりても推知せられたり。瑞典・諾威の如き、地球西北の一隅に僻在して文物いまだ開化の盛なるに至らざるも亦察せらる。場中の物品排列の盛大なる既に凡例にも言へる。如く普く記し盡く載る能はざれば如く闕如に附し所見の大略を筆する而已。[13]

早期の万国博覧会は、多くのバザールのように観客に各国からの様々な出品物の売買の場を提供した[14]。しかし、初めて万国博覧会に参加していた渋沢栄一は、東西文明の差異を感じ、各国の出品物を見て、各国の国力の差異を感じ、万国博覧会が、実は各国の国力の展示場であると考えた。こうした見識は明治時代になるとますます明確になり、明治政府の殖産興業政策にある程度の刺激を与えたと思われる。そして、1873年のウィーン万国博覧会の際、明治政府は五つの参会目的を提示した。

第一目的

御国天産人造物ヲ採集選択シ、其図説ヲ可要モノハ之ヲ述作シ、諸列品可成丈精良ヲ尽シ、国土之豊饒ト人工之巧妙ヲ以テ御国ノ誉栄ヲ海外ニ揚候様深ク注意可致事。

第二目的

各国之列品ト其著説トヲ詳密点見シ、又其品評論説ヲ聞知シ、現今西洋各国ノ風土物産ト学芸ノ精妙トヲ看取シ、機械妙用ノ工術ヲモ伝習シ、勉メテ御国学芸進歩、物産蕃殖ノ道ヲ開候様可致事。

第三目的

此好機械ヲ以テ御国ニ於テモ学芸進歩ノ為ニ不可欠ノ博物館ヲ創建シ、又博覧会ヲ催ス基礎ヲ可整事。

第四目的

御国産ノ名品製造方勉メテ精良ニ至リ、広ク各国ノ称誉ヲ得、彼日用ノ要品トナリテ後来輸出ノ数ヲ増加スル様厚ク注意可致事。

第五目的

各国製造産出ノ有名品及其原価売価等ヲ深捜査明シ、又各国ニ於テ欠乏求需スルノ物品ヲ検知シ、後来貿易ノ裨益トナル様注意可致事。[15]

幕末から芽生えたヨーロッパ市場に向かって進出する構想は、明治時代に入ると現実になった。岩倉使節団は、1873年ウィーン博覧会において日本の出品物の優勢を発見した。その時の『米欧回覧実記』

13）渋沢栄一『渋沢栄一滞仏日記』、東京大学出版会、1967年6月、80-81頁。

14）“The Opening of the Great Exhibition”, *The Times*, May 2, 1851.

15）『墺国博覧会参同記要』、『明治前期産業発達史資料』、第八集（2）、明治文献資料刊行会、1964、11-12頁。

によれば、

> 我日本国ノ出品ハ、此会ニテ殊ニ衆人ヨリ声誉を得タリ、是其一ハ其欧州ト趣向を異ニシテ、物品ミナ彼邦人ノ眼ニ珍異ナルニヨル、其二ハ近傍ノ諸国ニ、ミナ出色ノ品少キニヨル、其三ハ近年日本ノ評判欧州ニ高キニヨル、其内ニテ工産物ハ、陶器ノ誉レ高シ。（下略）[16]

とあり、日本からの出品物が、ウイーンの博覧会において高い名声を得たことがわかる。東アジアの展示物の美しさと丁寧な仕立てがヨーロッパ人の好評を博するのは当然であったろう。

上述したように、日本は幕末から万国博覧会を注視し、明治時代になると積極的に関与するようになったのである。

(3) 晩清政府の参会

中国製品が、万国博覧会において展示されたのは1851年の最初のロンドン大博覧会であった。“The Illustrated London News” 1851年５月10日付に見える大博覧会の開幕日の挿絵に、清朝官僚の身なりをした中国人の姿が掲載されている。この人物について当日の記事に、

> The second Illustration upon the front page is very characteristic. Among the circle surrounding the daïs upon which her Majesty was seated, the Mandarin He-Sing, of the Chinese junk Keying, was conspicuous. The Mandarin arrived at the Crystal Palace at about half-past ten, in a carriage, attended by his secretary, and, on his entrance, he was immediately introduced into the area reserved for the Great Officers of State, and the Royal and Foreign Commissioners. After the gracious reply of her Majesty to the address read by the Prince Consort, the Mandarin He-Sing was specially noticed by her Majesty; and the important functionaries between him and the Queen having separated on either side, the Mandarin approached the throne, and had the high honour of saluting her Majesty by a grand salaam, which the Queen most graciously returned. The Mandarin was also much noticed by the young Prince of Wales and the Princess Royal.
>
> On the formation of the Royal procession round the Building, Prince Albert, at the suggestion of the Queen, was pleased to convey to the Mandarin a special request that he would join in the procession; and he, accordingly, took his place between the Archbishop of Canterbury and the Comptroller of her Majesty's Household, and accompanied the Royal progress throughout the inauguration ceremony. It should be added, that the Mandarin was the only representative, at the Exhibition opening, of the vast empire of China.[17]

16）『米欧回覧実記』第五冊第八十三巻、「万国博覧会見聞ノ記　下」、岩波書店、1982年５月、43頁。

17）“The Chinese Mandarin”, *The Illustrated London News*, May 10, 1851.

と記されている。当日の開幕式に参加した各国の要人の中に、清朝官吏の身なりをしていた中国人はヨーロッパ人の目を非常に引いた。「He-sing」という中国の代表は水晶宮に入ると、すぐにイギリスの総理大臣、大蔵大臣、外務大臣、内務大臣及び王任委員たちに紹介された[18]。その後、彼はビクトリア女王の注意を引き、女王の王座に近づいて、敬意を表した。水晶宮を巡視する行列を結成する時、女王の提案で、アルバート公によりHe-singが王家の行列に加わって、カンタベリー大主教と王室執事の間に配席され、王室の成員と一緒に開幕式に参列したのであった。このことから、最初の万国博覧会において中国の唯一の代表がイギリス王室から特別の礼遇を受けたことがわかる。

しかし、中国が一人だけを最初の万国博覧会に派遣したことは、イギリスの主催者たちを失望させたと思われる。実は、その中国人についての記事は、彼がKEYINGという中国ジャンクに乗ってロンドンに到着し、大博覧会の開幕式に参加したこと以外、十分に明らかにできない。イラストから見られる中国の大きな花瓶・清朝官僚の肖像画・青銅器・陶磁器・屏風・牙彫・七宝焼など[19]はすべてRutherford Alcockまたはイギリス東インド会社により代行出展されたものであった[20]。

1860年代になると清朝政府は、初めて使節団をヨーロッパに派遣した。使節団の随員の日記や著書などから、中国人の早期万国博覧会についての印象がうかがえる。

1866年、京師同文館の学生である張徳明[21]は英語が堪能であったため、通訳として斌椿に随ってヨーロッパを訪問した。帰国後、彼はヨーロッパでの見聞について『航海述奇』を著した。この書には、1867年に開催されるパリ万国博覧会の準備の事情が記録されている。

> （1866年）三月二十四日癸未、早有福州税務司美里登来拜、其人面白烏鬚、能談華英言語。遂同彼登車行三里許、至法国工程處。有大官数員。上楼落坐喫茶。有伊姓者云法君欲将百里教場改建百里楼房、作考産厰、按天下国都造楼。国之大者、備楼数間。小者六七間。再小者、二三間。内将天下郡国賜送之土産、服色、器皿、置於其内、以便民間壮観。（中略）定在次年夏間在巴黎斯会齊。法君擇其優者奨以寶星。言畢取出圖様数張與看、後送斌公二張。[22]

18）これまで、Hesingの身元がほとんど確認できない。胡宝英氏は「首届世博会中国館英商説了算」（『東方早報』、2009年9月28日）には、*The North-China Daily News*においてHesingが中国の親王であったという噂に対し、イギリス学者John Davis氏の研究を引用し、Hesingがテムズ川に停泊していた中国のジャンクで働いていた中国船員であったという可能性があると指摘している。明らかに、Hesingは皇族ではない。皇族あるいは清朝政府が派遣した官僚であれば、政府側に関連の記録が残されているべきである。しかし、これまで、清朝の文献においてHesingという人に関する記録が見つけられない。そのため、この人は清朝政府から公式派遣された代表ではなく、広東などの地方の官員か商人であった可能性もある。

19）*The Illustrated London News*, Nov. 22, 1851.

20）1833年、イギリス政府によるイギリス東インド会社の中国貿易の許可が切れたが、会社の商人も個人的に東インド会社の名を使い、広東で商売を行った。H. B. Morseの*The chronicles of the East India Company trading to China, 1635-1834*, vol. 5, Oxford : Claredon Press, 1929, を参考した。

21）後は張徳彝に改めた。

22）張徳彝『航海述奇』巻二、上海申報館仿聚珍版、1867年、8頁。

とあるように、斌椿一行が福州税務司であったフランス人の美里登（De Meritens）の案内で博覧会の工事現場を見学した。「百里教場」と言うのはChamp de Mars（シャン・ド・マルス）である。「考産廠」とは各国の土産を展覧する場所すなわち展示場である。Champ de Marsは、もともと軍隊を訓練する教練場であり、万国博覧会の際、改築して博覧会場とされた。斌椿は工事の担当者から二枚の図面をもらっている。

上述したように、1851年のロンドン大博覧会に中国からの展示品があったが、最初にヨーロッパへ派遣した使節は、パリ万国博覧会の工事現場を見学するだけであり、中国政府は公式に参加出品しなかった。中国からの展示品があったと言っても、それは中国駐在のイギリス外交官が出品した物であった。その後、1873年のウィーン博覧会から1905年のリエージュ万国博覧会まで、長らく中国海関に務めていたイギリス人が、中国による万国博覧会への出品物の代行を行っていたのであった。中国海関総税務司であったハート（Robert Hart）とキャンベル（James Duncan Campbell）は、中国政府に代わってすべての万国博覧会に関する事務を取り決めていた。たとえば中国の官員が参会しようと要求しても、彼らはイギリスの利益を考えて断っていたのである。[23)]

1876年のアメリカのフィラデルフィアで開催された万国博覧会において、清朝政府は公式に人を派遣して参加した。中国代表である李圭は、もともとは南京の商人であり、中国海関総税務司であったハート（Robert Hart）の秘書を勤めたが、李鴻章により派遣され、中国を代表してアメリカ独立百周年記念するために行ったフィラデルフィア万博に参加した。彼がフィラデルフィア博覧会に参加し、その後に世界一周の旅行をして、『環遊地球新録』を著した。『環遊地球新録』には、フィラデルフィア博覧会の開催目的や中国の出品物に関して次のように述べている。

> 光緒二年、即西暦一千八百七十六年、美国費里地費城倣欧州賽会例、創設大会。先期布告各国、広集天下宝物、古器、奇技、異材、互相比賽、以志其開国百年之慶。籍以敦好篤誼、奨才励能焉。（下略）
>
> 中国赴会之物、計七百二十箱、値銀約二十万両。（中略）北向建木質大牌楼一座、上面大書「大清国」三字。横額曰「物華天宝」。聯曰「集十八省大観、天工可奪；慶一百年盛会、友誼斯敦。」（下略）
>
> 進牌楼、正中置橱柜数事、高八、九尺、倣廟宇式、亦以木制塗金采。四面嵌大塊玻璃、儲各省綢緞、彫牙、玩物、銀器及貴重之品。左列武林胡観察景泰窯器。右列粤省漆器、綉貨、鏡屏。後列各式烏木椅榻。再後為寧波彫木器、海関経辦磁器、及粤人何干臣各種古玩。（下略）
>
> 物産以糸、茶、磁器、綢貨、彫花器、景泰器、在各国中推為第一。銅器、漆器、銀器、藤竹器次之。若玉石器、几無過問者。因憶従前法、奥之会、我国雖亦送物比賽、而未獲貿易之益、以無華人往也。[24)]

23）『中国海関密檔――赫徳、金登干函電匯編（1874-1907）』、中華書局、1990年６月、645頁。

24）李圭『環遊地球新録』、湖南人民出版社、1980年８月、３－９頁。

とある。アメリカは、ヨーロッパで博覧会が開催された例にならって、独立百周年記念のために諸国を招き、フィラデルフィアで万国博覧会を開催した。中国政府の出品物は、中国海関により代行するものと、広東商人の出品物を合わせると、その額は20万海関両にのぼった。李圭は、中国館の横額と対聯を起草した。中国の糸、茶、磁器は大人気であった。とりわけ陶磁器が展示されると売り切れたのである。その前のフランス万博とオーストリア万博とを比較すれば、中国海関のイギリス人が独断で行って、中国商人には営利がなかったため、あまり参加したくなかったことがわかる。

このことから、李圭は万国博覧会には中国の商業を促進する作用があることを知った。彼は、「顧各国設会之意、原以昭友誼、広人才、其著重尤在拡充貿易四字。而我華人、多以無益視之、亦由華人出外甚鮮、未得其就理耳」[25] と評し、外国に行った経験がある中国商人が多くないため、万国博覧会の機会を利用して貿易の拡充する方法を知らなければならないことを指摘している。

1876年に郭嵩燾は、駐英公使として派遣され、駐仏公使も兼務していた。彼は中国事務に関心を持っているウエイド（Thomas Francis Wade）などのイギリス人と付き合って、彼らの遊説で中国において博覧会を開催しようとした。1877年８月28日に郭嵩燾は、スティーブンソン（George Robert Stephenson）とフライア（John Fryer）に、上海における博物院の設立について相談していた時に、日本の駐英公使の上野景範がその場に居合わせた。そして、郭嵩燾は、日本の内国博覧会の様態を聞き取った[26]。

上述のように、19世紀60年代から清朝政府と明治政府は、すでに万国博覧会に注目し、万国博覧会の機会を利用して産業の振興を進めようとしていたことがわかる。中国より日本は一歩先んじて万国博覧会への参会の目的を明確にし、出品の方策を決め、万国博覧会を殖産興業と結びつけていたのである。そのため19世紀70年代になると、中日の出品物には差異が見られたのである。ヨーロッパにおいて二百年間流行していた中国趣味は、漸次に日本趣味に取って代わられていったのである。

二、19世紀70年代のヨーロッパにおける中国趣味から日本趣味へ

16世紀からポルトガル人やスペイン人・オランダ人が、絶えることなく中国の陶磁器などの芸術品をヨーロッパにもたらしていた。これらの中国産の芸術品は、ヨーロッパの上層社会とりわけ王室において大いに中国趣味を興した。そのため、17世紀から19世紀中期まで、シノワズリーが、ヨーロッパ上層社会で室内の装飾・絵画・服装などにおいて中国風の題材が好のまれ大流行していた[27]。しかし、19世紀中期になると、中国の芸術は足踏み状態で新しさを打ち出せないでいたため、ヨーロッパにおいて人気を失ってきた。これに対して日本の芸術が欧米で開花した。本節は、単にシノワズリーあるいはジャポニスムを美術史的な視点ではなく、19世紀後半におけるマスメディアの主要な形式である新聞 “The

25）同上、10頁。

26）銭鐘書編『郭嵩燾等使西記六種』、香港三聯書店、1998年７月、122頁。

27）Oliver Impey, *Chinoiserie: The Impact of Oriental Style on Western Art and Decoration*. Charles Seribner's Sons, 1977.

Times”や“The Illustrated London News”を通じ、初期万国博覧会という特定の環境において見られた中国趣味から日本趣味への変化の趨勢について考察するもののである。

1851年のロンドン大博覧会において、イギリスの主要なメディアである“The Times”や“The Illustrated London News”は、ほとんど中国の出品物に対して称賛した論調で紹介している。1851年5月2日付の“The Times”には、

> An extensive collection of native productions has been received from China. Among these several will be regarded with interest as likely to become valuable for commerce….
> A most interesting and complete collection of the various materials used at the great porcelain works of King Tih Chin, in the vicinity of Poyangdale, will be found in this collection, including the clay which forms the porcelain, and the materials with which it is coloured.[28)]

とあるように、中国からの大量の商品のコレクションがもたらされていた。その中のいくつかのものは、イギリス人から注目の的となり、貿易について高い価値があるとされた。最も興味をそそられたのは景徳鎮の陶磁器製造の原料であった。カオリンと顔料が含まれていたからである。

さらにイギリス人の中国陶磁器に対する趣味については、次の逸話にも反映されている。

> Among the objects exhibited in the Chinese department will be observed a complete collection of the various materials employed at the great porcelain works of Kiang Tiht’ Chin, as it is named in the catalogue, otherwise, according to better authourities, King Te Tching. This collection consists of specimens of the plastic clay of which porcelain is formed, and of the various colouring matters with which it is decorated.
> …The vessels obtained in tombs and other ruins bore marks of high antiquity. Thus it is related that vases were found which bore evidence of having belonged to the Emperors Yao and Chun, who reigned 2357 B.C., and 2255 B.C. In further corroboration of this, examples are produced of vases of Chinese origin found in ancient tombs at the Thebes, which appear by their inscriptions to have been fabricated 18 centuries before the Christian era. Several such vessels have been found. Mr. Wilkinson took two to England, one of which is in the British Museum, and another is in the museum at Alnwick. It was not, however, until a comparatively recent date that the fine porcelain, afterwards so celebrated and so esteemed in Europe, was fabricated in China. It was only under the dynasty of Song, from 960 to 1278 A.D., that porcelain began to be manufactured of fine materials, and to acquire that degree of

28）“The Great Exhibition”, *The Times*, May 2, 1851.

perfection which has since been so much admired.[29)]

中国の有名な陶磁器産地である景徳鎮のことといえば、イギリス人が知らないはずはない。フランスの宣教師ダントルコール（Francois Xavier d'Entrecolles）が、1712年と1722年に二度にわたって景徳鎮に行き、上級教会への手紙に中国の製磁技法等の秘訣を詳細に書き報告したからである[30)]。その手紙は、1741年にパリで出版され、ヨーロッパの陶磁器製造に大きな影響を及ぼした。しかし、ヨーロッパにおいて19世紀まで景徳鎮磁器のような美しい磁器が造られなかったため、中国と日本の陶磁器は絶えず求められた。19世紀になると、中国に赴いた西洋人が増えたため、彼らは直接に中国で価値ある陶磁器を求めた。その時、陵墓や遺跡から出土した骨董の磁器が大流行したのである。堯、舜時代のものが出土したとの噂もあったが、エジプトのテーベの古代の陵墓においても紀元前18世紀における中国製造の花瓶が発見されたとされた。こうした二件の花瓶は、ウィルキンソンによりイングランドにもたらされた。一件は大英博物館に収蔵され、ほかの一件は、アルインウィックの博物館に収蔵された。しかし、それはそのような古いものではなく、宋代の製品であることが確認された。

"The Illustrated London News" の記事から、博覧会で展示された中国陶磁器の原料に対してヨーロッパの人々にかなりの注意を喚起した。

Besides the objects from the East, exhibited by the East India Company, there are also some of considerable interest from CHINA. Of these we may especially refer to the series of materials used in the manufacture of porcelain, contributed through the Board of Trade, and forwarded by H. M. Consul, Shanghae. These include not only the china-clay, or kaolin, but also the china-stone, and the different earths and pigments used for various purposes, whether mixing, glazing, or colouring, in the great porcelain works of the East. No less than 70 packets are exhibited, containing samples of colours and colouring material employed in producing the various tints.[31)]

とあるように、東インド会社により出品された東方の品物以外に中国からのいくつかの興味を引くものがあった。イギリスの上海領事は、偉大な東方の陶磁器作品に用いられたカオリンや方解石、釉土、さまざまな顔料を博覧会の貿易委員会に送った。中国陶磁器の原料が、ヨーロッパの大衆の前に陳列されると、数世紀にわたる中国磁器についての種々の神話や噂が明らかになった。中国人が土・石を用いて素地を造り、さらに毛筆で素地に絵を描いて、そして窯で焼いて、鮮やかな磁器を完成するのは神話ではなく、偉大な創造であることが明確になったのである。

1851年12月6日付の "The Illustrated London News" には、イギリス商人たちが出品した中国の物品

29）"The Great Exhibition", *The Times*, Sept. 30, 1851.

30）ダントルコール著、小林太市郎訳注『中国陶磁見聞録』、第一書房、1943年。

31）"Exhibition Supplement", *The Illustrated London News*, May 24, 1851.

を紹介している。

> The Chinese portion of the Exhibition, though not so complete, partly from the native exclusiveness of the Chinese, partly from there not having been time to stir up the Cousin of the Sun and Moon to shine upon the project, was still, by help of various merchants, and Messrs. Hesetson, of Fenchurch-street, very full of interest. There was a Chinese mariner's compass, by which, pointing to the south, their junks were guided long before Julius Caesar in his triremes landed on our shores, and probably a thousand years or more before the Italian re-invention of the Egyptian and Phoenician compass, similar to our own, and by which the vessels of the latter found their way to us in the days of the commercial glory of Carthage. There were also wood engravings, which showed, as might be expected from such minute ivory carvers, no small skill in everything but perspective. The entire raw materials, skeleton of porcelain as they call it, and the colours used in painting it; vases, tea services, &c., having all the appearance of china, but being in reality enamels on copper; jars, from 10 inches to 4 feet high, form £2 to £250.[32)]

とあるように、中国の出品において中国国内からのものばかりでなく、一部はイギリス商人たちから出品されたものがあった。イギリス商人たちが中国の羅針盤・木版画・陶磁器の原料と顔料・花瓶・茶道具のセット・磁器のような七宝焼きを出品した。その中に古代中国人が、羅針盤を使用して世界航海史のトップに立っていたことが大いなる賛美を得たのである。シーザーのブリテン島侵攻より、エジプトのローマ化より、フェニキア人の羅針盤より、中国が最初に羅針盤を用いた国である。実は、中国人が早く羅針盤を用いて方向が判明するのは確かなことであるが、羅針盤がジャンク船に配置されるのは12世紀以降のことである。このニュースは、有名な商業民族であったフェニキア人がカルタゴの最盛期に羅針盤を用いてブリテン島に渡ったことを強調した。それは同様に羅針盤を使用する中国人もイギリスと通商を行うことができると暗示している。

1851年のロンドン大博覧会はヨーロッパに大きな影響を及ぼしていた。フランス学士院は、わざわざ二人の古典経済学者をオブザーバーとして派遣した。彼らの報告によれば、次のようにある。

> Their（Chinese）collection, imperfect though it is, bears witness to the wonderful instinct of this race for the most delicate and difficult manual work. But their porcelain, their works in lacquer and ivory, known from time immemorial, are made at the present day exactly as they have been from the most remote axes. We have nothing to envy them, unless it be the abundance of certain raw materials, and especially silk.[33)]

32）"Exhibition Supplement", *The Illustrated London News*, Dec. 6, 1851.

33）"The Institute of France and the Great Exhibition", *The Illustrated London News*, Dec. 13, 1851.

とあり、フランスの経済学者が、中国の出品を咎め立てていたことがわかる。彼らは中国人が最も精巧な手工品に堪能であると考えた。博覧会に出品したものは完璧ではないが悪くないと言われた。しかし、その二人のフランス人は、中国の陶磁器や漆器、象牙細工が非常に気に入らなかった。それらの長い歴史がある工芸品は、19世紀になってもはるか昔の斧で造られたようであると指摘した。この評価は辛辣であるが、フランス人の中国工芸品に対する観賞力を反映していた。

1862年の第二回ロンドン大博覧会において、中国の工芸品の競争相手として日本の芸術品が登場したのである。1862年9月20日付の“The Illustrated London News”によれば、

> Of the skill and workmanship displayed in the ornamental lacquering we can speak with the greatest praise; it is at once rich, tasteful, and solid in appearance, while the articles themselves are in reality remarkably light and handy. One large bowl, which for beauty of design in its ornamentation and elaboration in execution attracted our attention, was stated to be a rice-bowl. It would from a mighty adjunct to a table spread for a great feast, for which alone we presume it was designed. The lacquered boxes of all kinds are very numerous…. Attention may next to be directed to numerous lacquer and enameled objects in ivory, tortoiseshell, mother-of-pearl, &c., such as boxes, pedestals, saucers, buttons, and so on; and there is a good show of inlaid and carved woodwork on trays, writing-cases, &c…. Then we have specimens of china and porcelain, enameled, lacquered, and plain; pottery and quaint forms of earthenware, applicable to rough and common use; bases and jars of large size and much beauty; cups saucers, bowls, trays, teapots, dishes, and grotesque figures in lacquered china. Amongst these articles we would especially point out the specimens of a beautiful fabric for cups and saucers, which, for lightness, purity, and elegance, are almost unrivalled in the collection, and are known by the name of eggshell china…. There are bronze jars and vases of various sizes, some very large, ornamented or disfigured according to taste with dragons and other figures in alto-relievo; and there are also stands, baskets, frames to mirrors, candlesticks, grotesque figures, for which the Japanese, in common with the Chinese, seem to have an especial taste, and ingenious designs in bronze for various useful purposes.[34)]

とあり、Rutherford Alcockたち駐日外交官が、日本の漆器や磁器、青銅器を博覧会に展示していたことがわかる。巧みに飾れた漆工芸が展示されると、たいへんな褒め言葉を受けた。それらの漆製品は、外観が贅沢で、上品であり、堅固であるが、その本体も極めて軽く巧みであるとされた。日本磁器について、とりわけ「卵殻磁器」という薄手の磁器のコップと受け皿は、陶磁器のコレクションには比肩できるものは無いと言及されたのである。そうした製品の美さ、清楚そして優雅さは観衆を引き付けた。

1862年までイギリス人が、中国と日本からの出品を代行したため、ロンドン博覧会において中国の芸

34）“The Japanese Court in the International Exhibition”, *The Illustrated London News*, Sept. 20, 1862.

術品も日本の芸術品も同様に重視されていた。

1867年のパリ万国博覧会における中国に関連する記事は多く見られない。しかしながら、若干の新聞記事によって万博が開幕した後、中国館はまだ完成していなかったことがわかる[35]。他方、日本の徳川昭武使節団が開幕式に参加していた。“The Illustrated London News”によれば、

> Japan is represented by something like half a dozen, all of whom, at the opening of the Exhibition, wore mushroom-shaped hats and inconveniently long-handled swords, and had a peculiar vacant, old-womanish look about them, as though the singularity of the surrounding scene did not impress them in the least, and who seemed to consider it a great bore to be continually stared at by hundreds of curious barbarian eyes.[36]

とあり、幕府使節団が西洋人に奇怪な印象を与えたことがわかる。幕府の代表がキノコ状の帽子をかぶり、不便な太刀を身につけ、周囲の特異な環境に動揺しないようにうつろな顔をし、好奇心が強い西洋人の注視に耐えていたということから、その時、西洋人は日本の伝統文化に対する知識を持っていなかったと思われる。

上述のように、パリ博覧会における、中国の出品の状況は明確にできないが、日本の出品に対する評価も明らかにすることは難しい。富田仁氏は『花のパリへ少年使節』の解説「慶応三年パリ万国博覧会をめぐる人びと」において、1867年博覧会について残されている日本に関連する記事が少ないとしたが、大島清次氏はこの判断について異論を立て、自身の調査により、パリの国立図書館には、1867年のパリ万博に参加した日本関係図版を付けた出版物がかなりあると指摘している[37]。しかし、大島氏はこれらの資料を具体的に列挙しないため、こうした日本関係文献は一般に公開されていないのであろう。

そのため、日本や中国に関連する記事が十分に知られないため、日本趣味と中国趣味との比較をすることが困難である。この結果、日本風笠をかぶり、太刀を持っていた日本人より、明治維新後の洋服を着た日本人のイメージの方がヨーロッパ人にさらに印象を深めた。すなわち、明治政府が公式参加した1873年のウィーン万国博覧会が、中国趣味から日本趣味への転換点となったのである。

1873年４月11日付の“The Times”に‘The Japanese Art’と題する専門的な記事が見られる。そこでは、日本の芸術品がヨーロッパの芸術スタイルに影響したことが論じられている。

> The Japanese are in a very forward state of preparation, and, thanks to the courtesy of the Commissioners, one may inspect most of the objects which are still roped off from the general public. The more you look about you, and the more you admire as you go wandering among porcelain and glass and fine metal work displayed by European nations, the more do

35）*The Illustrated London News*, May 4, 1867.

36）Ibid. April 6, 1867.

37）大島清次『ジャポニスム：印象派と浮世絵の周辺』、美術公論社、1980、54-55頁。

you recognize the spirit of the Japanese artist in the ascendant everywhere…. It is true that in very remote times they were in intimate relations with the vast Celestial Empire. To the present day, time counts for little with them, which may go a long way to explain the extreme delicacy and perfection of their workmanship. But it all scarcely sultices to account for the chastened richness their colouring and the marvellous graces of their forms. In any of the other Art Courts in the Exhibition ingenious illustrations of ugliness mingle with the things of beauty. Often the same exhibitor delights and shocks you. With the Japanese it is scarcely too much to say that all is original, beautiful, or quaint, for most of the exceptions which prove the rule are instances in the very latest years, when they have taken to imitating Europe.[38)]

とあるように、日本芸術のスタイルが、ヨーロッパにおいて出品された芸術品に影響を与えた。ヨーロッパ諸国により出品されていた陶磁器、ガラスそして立派な金属製品が感嘆されればされるほど、ヨーロッパの出品物より、日本の芸術品の優勢が認められたのである。ただし、日本の芸術品はかつては中国スタイルを模倣しても、19世紀後半においてすでに中国の影響から抜け出していた。ほかの国の出品物には上品なものが展示されていても粗製の展示品もあったのである。しかし日本の出品物は全て立派なものであった。日本人がヨーロッパ人の嗜好品を模倣して以来、ヨーロッパ人はさらに日本の美しく巧みな出品を期待していたのである。

一方、日本人は、ヨーロッパ人が愛好する様式を模倣していたが、ヨーロッパ人は日本風の陶磁器に類似させて製造していた。1873年11月１日付の“The Illustrated London News”によれば、

The English china court at the Vienna Exhibition was a department of special attraction. Among those manufactories of repute which have contributed to uphold our national reputation a prominent place belongs to the Royal Porcelain Works of Worcester. It must have been remarked that public taste, led by the judgment of art-connoisseurs in China, has long been directed to the peculiar treatment of ornamental design in Satsuma and Japanese manufacture. The Worcester Works have taken advantage of this taste to design specially for the Vienna Exhibition a large a large collection of ceramic art-work, which has gained the attention of illustrious visitors, art-connoisseurs, and the public by its unique style and the perfect taste and refinement in which its design is treated. …

In the Illustration we have engraved are shown objects selected by the Emperor of Germany, the Archduke Charles of Austria, the Count de Chambord, the Earl of Dudley, and Sir Richard Wallace. So much was this manufacture appreciated at Vienna that most of the families of distinction in Germany and especially the Austrian, Hungarian, and Bohemian

38）“The Japanese Art”, *The Times*, April 11, 1873.

nobility have purchased valuable specimens for their cabinets.[39)]

とあり、イギリスのロイヤル磁器製造所であるウスターは、薩摩焼を模倣して作った磁器を出品していた。ウスター・ロイヤル陶磁器製造所は和風の模造品を展示したため、ウィーン博覧会においてイギリスの陶磁器展示場は極めて魅力あるコーナーとなった。これらの和風の模造品は、ヨーロッパの王室や貴族の間で高く評価された。ドイツの皇帝やオーストリアのチャールズ大公、シャンボール伯爵、ダドリー伯爵、リチャード・ウォーレス男爵は、ウスター製の日本風磁器を選んだ。ドイツ・オーストリア・ハンガリー・ボヘミアは、自国で優良な陶磁器を製造していたが、これらの国の貴族たちは日本風磁器を求めた。したがって、ヨーロッパにおける日本趣味が喚起されたのである。

この文章には、以前には中国のものを愛好する鑑賞家の意見で主導されていたヨーロッパ公衆の嗜好は、すでに薩摩焼または日本製造に変わったと論じられている。この判断から、1873年ウィーン万国博覧会は、中国趣味から日本趣味に移行し、転換した契機になった博覧会と思われる。大島清次氏はジャポニスムの興起について1867年のパリ万国博覧会からほぼ十年を経て開催された1878年のパリ万博を注目し、また馬淵明子氏は1867年－1870年代をジャポニスムの「発見の時期」とする[40)]。本論文はジャポニスムの問題については十分に検討しないが、大島と馬淵両氏の意見に基づいて、1873年のウィーン博覧会を契機に中国趣味が日本趣味に取って代わる趨勢が出現したことを述べたい。

その後、1876年になると、James Jackson Jarves（ジャイムズ・ジャクソン・ジャーヴズ）は “A Glimpse at the art of Japan” において、次のように中国の芸術を評している。

> Ever since Chinese art has followed the European mercantile track it has lost more and more of those qualities which made it only second in interest to that of Japan. As we now get it, the bizarre, extravagant, exaggerated degenerating into positive ugliness, want of fresh invention and love of nature, and an abundance of diabolism; such are the more obvious features of what is left of the original art of the Celestial Empire, tempered somewhat by Lingering traditions of the once matchless, pure tints of its porcelains, but really rejoicing most heartily in overcoming mechanical or technical difficulties.[41)]

この記述から、中国芸術がヨーロッパへの輸出の影響で変調し、漸次に自身の品質を失って行き、ヨーロッパにおける日本趣味より第二位に退潮したとされた。奇異な、ぜいたくな中国芸術は完全に醜い物として誇張的に退化し、新しい創成と自然への愛情そして豊富な魔術が求められた。それは「天朝帝国」即ち中華帝国の本来の芸術に残されているもっと明らかな特徴であり、なかなか消えない伝統、即

39）“Worcester Japanese Porcelain at Vienna”, *The Illustrated London News*, Nov. 1, 1873.

40）大島清次前掲書、49頁。馬淵明子「ジャポニスムの系譜――第１回初期英語文献集成序文」、Akiko Mabuchi, ed., *Japanese Art and Japonisme*, vol. 1, Ganesha Publishing, 1999, viii.

41）James Jackson Jarves, *A Glimpse at the Art of Japan,* Hurd and Houghton, 1876. Akiko Mabuchi, ed., *Japanese art and Japonisme,* vol. 1, Ganesha Publishing, 1999, p. 146.

ち旧時の無比の設備や技術の問題を克服した清い濃淡をつけた陶磁器により鍛えられるとした。

中国芸術は対ヨーロッパ貿易の中で自己の特徴を失ったのに対し、日本芸術はヨーロッパの人々の目を奪うとともに自身の特徴を強化した。ヨーロッパに流行していた中国趣味が日本趣味に取って代わられた状況は以上の通りである。

おわりに

16世紀から、ポルトガル商人やスペイン商人そしてオランダ商人により中国と日本の芸術品は絶え間なくヨーロッパに輸出され、ヨーロッパの上層社会に異文化の魅力で「シノワズリー」を興した。特に、中国陶磁器はヨーロッパにおいて非常に高い評価を受けた。しかし、それらの東洋芸術品はヨーロッパの王室あるいは富裕な私人の収蔵であり、公衆に見られることは殆ど無かったと言える。それが19世紀後半から興起した世界風物の展示場という万国博覧会において見られた豊富な東洋の出品物は、ヨーロッパ公衆の前に陳列されたのである。その時期に従来からの中国への非常な趣味は、漸次に日本趣味へと変化していったのである。

1851年、最初の万国博覧会において、He-sing という中国人が開幕式においてイギリス王家の優遇を受けていたことを見れば、イギリス人は中国人の参会に大変注意を払っていたことがわかる。そのため、初めてヨーロッパにおいて展示された景徳鎮の陶磁器や陶磁器用の原料はヨーロッパ人に深い印象を与えたのである。

このようなヨーロッパにおける中国の出品物への偏愛に対して、1862年のロンドン博覧会において出品された日本芸術品が登場すると、それに変化が見られるのである。この時の日中の出品物は、イギリス外交官の嗜好により選択出品されていたものであったため、ヨーロッパ人の愛好を重視し選択されたものであったが、ヨーロッパの大衆には中国出品も日本出品も大いに賛美された。

しかし1873年のウィーン博覧会において、明治政府は万国博覧会に公式に参会し、そのために万全な準備がされた日本の芸術品は、ヨーロッパの人々の目を奪ったのである。この同じ博覧会にイギリスのロイヤル陶磁器製造所であるウスターが出品したのは、日本の薩摩焼を模造した和風磁器であった。これを契機に、ヨーロッパの上層社会に日本趣味の風潮を喚起したのであった。このことからも明らかなように、ウィーン博覧会は、ヨーロッパにおける東洋趣味の転換点となった万国博覧会である。これを境に、日本趣味は漸次ヨーロッパで受け入れられ、中国趣味は徐々に衰微していったのである。